

論 文

「労働の二重性」と未来社会論

——「抽象的労働」の超歴史的解釈によせて——

宮 川 彰[†]

要 旨

AI技術の進化と生産力の飛躍的拡張のもとで労働時間の激減が間近に予測されるなか、マルクス労働価値説の要石「労働の二重性」/「抽象的労働」範疇は未来社会で発展するか失効するかが問われている。1920年代ソ連で繰り広げられた価値論論争の論点と重複しながら今日わが国でも、「抽象的労働」の理解にかんして人類史社会一般にあてはまる「超歴史的」「生理学的」な普遍的概念かそれとも商品経済固有の歴史的概念かをめぐって対立した解釈のあいだで論争が引き継がれている。本稿では、「労働の二重性」把握の成立史起源をたどり、また、交換価値に基づく社会が止揚される過渡期未来社会での「労働時間」尺度のあり方にまで透視したマルクスの考察を跡づけつつ、「超歴史的」解釈を代表する見田石介所説を批判的に検討する。人間労働力支出という生理学的振る舞いを「自然的基礎」、「裏付け」に位置づけ、歴史的な交換経済を母体とした経済的形態規定を尽くす諸規定を論定することが、本稿視点のカギとなる。

はじめに

近年のAI IoT技術(人工知能、ものの情報ネット)のめざましい進化と産業社会への普及・浸透を背景に、今後ないしは近未来の人間労働のあり方や意義・役割、影響などをめぐってさまざまな視点から問い直す機運が高まっている¹⁾。

2013年オクスフォード大学発のフレイ＝オズボーン研究論文と2年後の野村総研の調査研究をきっかけとして、AI機械化の進展で大量失業の高波が押し寄せるとの話題が急浮上。前者では現在の仕事の9割が、後者では10～20年後に労働人口の49%の仕事がなくなるという、さし迫って衝撃的な研究予測だった。

[†] 首都大学東京名誉教授 E-mail: miyakawa529@hb.tp1.jp

1) 井上智洋『人工知能と経済の未来』(文春新書)2016年、雑誌『経済』2018年12月号特集「AIと人間社会」の諸記事、海老原嗣生「『AIで仕事なくなる』論」(『日本経済新聞』2018年8月14日付け夕刊)、C・オニール(久保尚子訳)『あなたを支配し、社会を破壊する、AI・ビッグデータの罠』インターシフト、2018年、友寄英隆『AIと資本主義』本の泉社、2019年など。

労働者もしくは業務の5割、9割が省力化されるとなれば、旧来の資本主義的雇用関係の巨大で深刻な本質的な変容が避けられない、このことはだれもが推知するところであろう。未曾有の大量失業に連なって、労働者階級の“階級の死滅”や資本主義経済の“自然死”など「予言」がとび交い、ひいては種々の社会的セーフティネット拡充策の提言やしくみづくりの議論がにわかに脚光を浴びるなど、あらためて関心がつって来ている。本稿ではこの方面の議論にはかかわらない。

「抽象的労働」範疇は、未来社会では失効するのか発展するのか？

もう一つのインパクトは、5割/9割方の労働省力化の予測と結びついて直ちにネガ像に思い浮かぶのは、(逆数でみた)5割/1割への労働時間の短縮(軽減)、そのゆくえにかかわる問題である。人類がこれまでに経験したこともないような急激で抜本的な労働時間の短縮の可能性、そしてこれに連なる近未来像をめぐる議論が、一段とリアリティおびて喚び起こされようとしている。階級“衰滅”のコトバさえ生みだすほどの、激甚なる労働時間の縮減の事態の予測をまえに、はたしてマルクス『資本論』の要石である労働価値説、その支柱「労働の二重性」の把握および剰余価値論はどこまで命脈を維持できるか、あるいはむしろ真価が蘇生・発揮されることになるのか? 「労働の二重性」理解の論議はこの論題にどのように関与できるのか、が試されようとしている。

この主題に照応して、重なり合うテーマの先行議論が想起されよう。1920年代ソ連を舞台としたマルクス価値論・「労働の二重性」論争の文脈の中で、なかんづく「抽象的労働」の意味解釈をめくり(「生理学的意味」での超歴史的概念か、それとも、交換関係に固有の「社会的」歴史的的概念か)議論が積み重ねられた²⁾。この時期のソ連計画経済づくりというすぐれて実践的な課題に即した切実な理論的要請として、「商品経済から社会主義経済への移行の条件のもとでは「抽象的労働」の運命はどうなるのであろうか。」「社会主義のもとではこの範疇は失効するのか、それとも、いっそうの発展と重要度を増すのか?」(論争の代表的一論客ダシコスキーによる提起)と提起されていたのである。こんにちわが国でも、「労働の二重性」/「抽象的労働」の解釈をめぐる分岐対立する状況にあるが、論構えや個別諸論点にかんする彼此の類似共通性や異同の考察は、本主題の議論の前進の寄与に期待できるかもしれない。

本稿では、前半の第1、2節で、キーワード成立の背景・基礎を発掘、確認する。「資本論」構想における「労働の二重性」把握の成立史ルーツを跡づけ、「資本論」体系におけるその位置づけや意義を俯瞰する。第3、4節では、「労働の二重性」/「抽象的労働」解釈をめぐる旧ソ連での論争を参考にしながら日本での議論を再点検し、未来社会におけるこれら概念の意

2) 竹永進(編訳著)『ルービンと批判者たち 原典資料20年代ソ連の価値論論争』情況出版、1997年。本書には、当該論争題目かんして1924年~29年にソ連で公刊された主要なロシア語論文記事5本が編訳収録され、編訳者による、詳しい解説が寄せられている。

義の見通しの考察におよびたい。

1. 「労働時間の節約」と交換価値規制の終焉 マルクスの未来社会素描

(1) 機械高度化と交換価値の有効性の射程 未来社会論のひとつコマ

この題目に関して、われわれは予備考察に、マルクスが本領躍如として将来社会を予見した素描に目通ししておきたい。“原資本論”とも目されている1857-58年執筆の草稿『経済学批判要綱』、その項目「資本にかんする章」では、機械装置の「自動的体系の完成型」の進化の極みにおいて、「大工業がおよぼす人間活動と交通との変容」の所産として、労働時間の抜本的短縮と、「交換価値を土台とする生産の崩壊」におよぶ必至性が、論及されている。後の議論[非交換経済下での抽象的労働の現れ]展開のために手がかりとなり得る記述でもあり、長くなるが引用でみておこう。

「大工業が発展するにつれて、現実的富の創造は、労働時間と充用された労働の量に依存することがますます少なくなり、むしろ労働時間のあいだに運動させられる諸作用の力[生産力に集約されうる……引用者]に依存するようになる」。/ 「この変換のなかで、生産と富との大黒柱として現れるのは、人間自身が行う直接的労働でも、彼が労働する時間でもなくて、彼自身の一般的生産力の取得、自然に対する彼の理解、そして社会全体としての彼の定在を通じての自然の支配、一言でいえば社会的個人の発展である。現存の富が立脚する、他人の労働時間の盗み[雇用関係のもとでの搾取……引用者]は、新たに発展した、大工業それ自身によって創造されたこの基礎に比べれば、みすばらしい基礎にみえる。直接的形態における労働が富の偉大な源泉であることをやめてしまえば、労働時間は富の尺度であることを、だからまた交換価値は使用価値の尺度であることを、やめるし、またやめざるをえない。……それとともに交換価値を土台とする生産は崩壊し、直接的な物質的生産過程それ自体から、窮迫性と敵対性という形態がはぎとられる。諸個人の自由な発展、だからまた、剰余労働者をうみだすために必要労働時間を縮減することではなくて、そもそも社会の必要労働の最小限への縮減。その場合、この縮減には、すべての個人のために自由になった時間と創造された手段とによる、諸個人の芸術的、科学的、等々の鍛錬[Ausbildung 開発……引用者]が対応する。」(『経済学批判要綱』、邦訳 大月版『マルクス資本論草稿集』、489-490頁。以下、出典は、訳『草稿集』・・・頁のように略記する。)

そして、この引用に続く展開のあとには、「現実の経済は、労働時間の節約」の命題が以下のとおり帰結されている。

「真実の経済——節約——は、労働時間の節約（生産費用の最小限への縮減）にある。だが、この節約は生産力の発展と一致している。だからそれは、享受を断念することでは決してなく、生産のための力、能力を發展させること、だからまた享受の能力をもその手段をも發展させることである。労働時間の節約は、自由な時間の増大、つまり個人の完全な發展のための時間の増大に等しく、またこの發展はそれ自身がこれまた最大の生産力として、労働の生産力に反作用をおよぼす。」（同上訳 499頁、下線強調は引用者）

引用テキストの論点・論旨はきわめて明快である。「自動機械体系の完成型」のもたらす巨大な生産力は、第1に、労働生産物をつくるのに社会的に必要な労働時間の圧倒的な縮減をもたらす。つまり、「窮迫性と敵対性」をおびた剰余労働の搾取関係（ $v + m$ ）すらもその時点には「みすばらしくみえる」ようになるほどに労働時間の比重を低減させる。第2に、この労働時間の節約は「自由な時間」を増伸し、このことがまた生産力に反作用をおよぼす。そして、第3に、これらの交互作用の結果、直接的労働が富の源泉であることをやめ、労働時間したがってまた交換価値が使用価値（富）の尺度であることをやめざるをえず、もって交換価値を土台とする生産の体制は崩壊する、という論旨である。

（2）「真実の経済は労働時間の節約」が意味するもの

このテキスト素描に登場する社会構成の歴史的発展段階はどのようなものであろうか。あきらかに資本主義段階ではありえず、そこから一線を越え出たステージの話である。また交換価値規制を克服してしまったところの将来社会、共産主義段階の舞台でもありえない。労働時間と交換価値とが経済的富の尺度としてなお通用し続けているが、同時に、生産力の飛躍的拡張につれて交換価値の比重と機能を衰退させつつあるような、市場経済の彼岸に接続する近未来、すなわち過渡的な社会主義もしくはいわゆる「共産主義の第一段階」、とみなすことができるのではないだろうか。ちなみに、行きつく極みの彼方はといえば、「交換価値を土台とする生産は崩壊し、直接的な物質的生産過程それ自体から、窮迫性と敵対性という形態がはぎとられる」と特徴づけられる社会である。いわゆる「共産主義の第二段階」のことであろう。主舞台は、生産手段の社会化が達成され資本主義は止揚（アウフヘーベン）されたものの、未ださまざまな私的所有の残存のために、交換価値と価値法則の効力は失われずに私的所有の残滓の一掃まで機能し続ける、という過渡期ステージである。

キーワード群は以下のようにたどることができる。最新鋭の機械合理化によって促される、飛躍的な労働の生産力の拡張と、それにともなう労働生産物の増大（経済的富 / 使用価値の増進）と費やされる労働時間の低減（交換価値の相対的低下）、これらの作用を通してすすむ必要労働の低下 / 剰余労働の拡大、さらには、それらをふくめた窮迫・強制的な直接的な労働時間の縮減と真の自由時間の拡充、これらの交互作用プロセスで招来されるところの、交換価値を

尺度とした富規制機能の終焉、以上である。基底の流れには、生産力と生産交易関係とのあいだの照応と矛盾の展開を俯瞰することができる。また、使用価値と交換価値とのあいだの、労働面で言い換えれば、具体的有用労働と抽象的労働とのあいだの、相互作用の行くえをも、読み取ることができよう。

引用テキストで留意しておきたい点は、そうした理論的洞察が、「労働の二重性」把握と剰余価値論という——のちの『資本論』最大の真髄と目される——理論的精華のハードルをクリアした後に、到達された一帰結だという点である。それゆえ、この引用の視点と見通しの基調とは、後年（十年後の）1867年刊『資本論』につらぬかれて見ることができよう。また、「自動的体系の完成型」の進化とは、こんにち21世紀初頭の AI IoT 技術革新に、重なるものにほかならない。「労働の二重性」把握と、それが未来社会論にとってどこまでどのように妥当・有効かを考察しようとする本論考にとって、問題の在りかの究明と検討の手がかりとなるにちがいない。

2. 「労働の二重性」把握の成立 古典派限界の超克

「労働の二重性」は『資本論』のかなめとなる基礎範疇である。第1部第1章の第2節冒頭では、「労働の二面的性質」について、周知の重要な注意喚起が掲げられている。

「最初に、商品は、二面的なものとして、すなわち使用価値および交換価値として、われわれの前に現れた。のちには、労働もまた、それが価値に表現される限りでは、使用価値の生みの母としての労働に属するのと同じ特徴をもはやもっていないことが示された。商品に含まれる労働の二面的性質は、私によってはじめて批判的に指摘されたものである。この点は、経済学の理解にとって決定的な点であるから、ここで立ち入って説明しておこう」。(新日本新書(1)70 71頁/MEW, Bd. 23, S. 56。以下、『資本論』の出典表記では、邦訳頁数/ドイツ語底本の頁数、を略記する。)

またマルクスは、初版公刊時の前後のある日のエンゲルス宛て書簡2通のなかで、「労働の二重性」把握とその観点が「僕の本の最良の点」であると矜持をこめて伝えている。

(1) 「僕の本のなかで最良の点は次の二点だ。(一) (これは事実のいっさいの理解がもとづいている) すぐ第1章で強調されているような、使用価値で表されるか交換価値で表されるかに従っての労働の二重性、(二) 剰余価値を利潤や利子や地代などというその特殊な諸形態から独立に取り扱っているということ。」(1867年8月24日付けエンゲルス宛て、国民文庫版『資本論書簡』(2)56頁、下線部はマルクスによる強調。)

(2) 「商品が使用価値と交換価値との二重物だとすれば、商品に表される労働の二重の性格をもっていなければならないという簡単なことを、経済学者たちは例外なく見落としていたのだが、他方、スミスやリカードなどにおけるような単なる労働への単なる分解は至るところで不可解なものにぶつからざるをえないということ。これこそは、じつに、批判的な見解の秘密の全部なのだ」(1868年1月8日付けエンゲルス宛、同書113頁)。

(1) 「労働の二重性」把握の意義

「労働の二重性」の定式化を確認しよう。『資本論』冒頭章の第2節「商品に表される労働の二重性」の節末尾の段落に、第2版で改訂追補され、本題目の凝縮された要約となっている。

1) 「労働の二重性」の定式化

「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間的労働力の支出であり、同等な人間的労働または抽象的人間的労働というこの属性において、それは商品価値を形成する。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間的労働力の支出であり、具体的有用労働というこの属性において、それは使用価値を生産する」(訳¹⁾79/61)。

この命題は、「抽象的労働」論争、すなわち生理学的自然的性質をおびた超歴史的概念か、それとも交換関係に固有な社会学的歴史的概念かをめぐって解釈の争われた論争では、両陣営から自説の論拠付けに引き合いに出されてきた、いわくつきの記述である。若干コメントしよう。

この要約のかなめの論旨は、第2節の主題目「商品に表される労働の二重性」の両特質それぞれについて、一般的な「人間労働力の支出」としての自然的な諸属性や機能で“基礎づけをあたえた”もの、“自然素材による物的裏付け”の説明、と無理なく解することができるのではないだろうか。“自然的な要素・条件”による“基礎づけ”、“物的裏付け”、という連関を押さえることが肝心だと思われる。一面では、価値を形成するのは、商品交換関係を前提として抽出される「同等な人間的労働または抽象的人間的労働」という属性だが、これには、「生理学的意味での人間的労働力の支出」(頭脳、神経、筋肉などの同質同等な生理的支出)という自然的機能の基礎づけが照応する。他面では、使用価値を生産するさまざまに異なる有用労働については、「合目的な形態での人間的労働力の支出」というそのままの具体的姿で、現実労働の振る舞いの感覚的につかめる自然的性質を確認することができる、という具合である。

別の角度から見てみよう。この要約段落に含まれる二つの命題は、文法的にみると同じ「すべての労働」を主語にもつ、二つの独立文の並立の構成をとる「重文」構造である。それぞれ前半の文では、「人間的労働力の支出」のさいに発揮されるところの、自然的もしくは生理学的意味での属性・機能によって、裏付けがあたえられている。したがって、これらの「基礎付

け」,「裏付け」は、いつの時代どの社会でもあてはまる人間的労働一般の普遍的性質をおびた諸規定であり、その限りでいつの時代や社会でもあてはまることはあきらかである。

これに対して、他方「重文」後半部の文では、前半の普遍的規定を基礎にすえそれに連繫しつつ、総括の規定が仕上げられる。すなわち、商品交換関係を条件として、具体的な姿での「異種性」(有用労働)とそこから抽出される無差別な「同等性」(抽象的人間労働)とが析出されること、そして前者具体的な有用労働が使用価値をうみだし、後者抽象的労働が価値を形成するという事情が、導きだされている。こうして商品生産の基礎の上に、現実の具体的諸労働と、そこからの交換を仲立ちとした同等な抽象的労働の抽出とが、すなわち「労働の二重性」の規定が、あたえられる。

さきに明らかにされたとおり、商品交換に基づいて析出(抽出)される「労働の二重性」が、「人間労働力の支出」という自然的属性および機能で“基礎づけ”、“裏付け”を得るという連関として、無理のない文脈で読み取ることができるのではないだろうか。

2) 商品交換と相即的な「労働の二重性」

「労働の二重性」は、歴史的に登場する商品交換経済では相即的に伴われる。現実の労働はさまざまな種類の具体的労働として個別的に発揮されている。それなのに、なぜ、具体的諸労働から、区別のない同等な抽象的労働への抽出・還元という迂回的な媒介の手続きが必要となるのか。「労働二重性」の成立条件を振り返って見ておこう。

本論題にかんして、——「抽象的労働」論争にかかわって——「私的労働と商品交換」もしくは「交換関係」を条件に組み入れる際には、「労働二重性」の出自、存立にかかわる前提条件を、明らかにしておく必要がある。この点についてマルクスは、『経済学批判要綱』のなかで、商品交換社会と共同生産社会との異同の比較考察から重要なポイントを明らかにしている。

「諸交換価値の基礎のうえでは、労働は交換をつうじて初めて一般的なものとして措定される。……[しかし共同社会的な]生産の基礎のうえでは、労働は交換に先立ってそのような一般的労働として措定されている。……[共同生産社会では、]諸生産物の交換は、およそ個々人の一般的生産への参加が媒介される媒体ではないであろう。[特殊な労働の一般的労働への]媒介はもちろん行われなければならない。個々人の自立した生産から出発する前者[商品交換社会]の場合は、自立したもろもろの生産が、それらの相互間の諸関連によって事後的にどれほど規定され変容をこうむるにしても、媒介は、諸商品の交換、交換価値、貨幣……によって行われる。[他方、共同生産社会]の場合には、すでに前提自体が(個人的労働が一般的労働に)媒介されている。すなわち共同社会的生産、生産の基礎としての共同社会性が前提されている。個々人の労働は初めから社会的労働として措定されている。……彼はなんら特殊な生産物を交換する必要はない。彼の生産物はけっして交換価値では

ない」と (『草稿集』 161 162頁, 下線はマルクスによる)。

商品交換社会と共同生産社会とのあいだの労働のあり方の相違にかんして、疑念の余地なき明快な指摘である。生産の基礎として「共同社会性が前提され」ている場合には、「個々人の労働は初めから社会的労働として措定〔承認〕されてい」て、「彼はなんら特殊な生産物を交換する必要はない。彼の生産物はけっして交換価値ではな」く、商品形態をとらない。商品交換社会では、個々人の私的労働の一般的労働への関連づけ、つまり私的労働の社会的承認は、諸商品交換、交換価値、貨幣によってのみ行われざるを得ない以上、抽象的労働の抽出・還元を仲立ちにすることは、不可避だったのである³⁾。

3) 「労働の二重性」の析出 古典派の限界の打破

さて、商品の「使用価値」「交換価値」ほどの区別、もしくは、現実の感性的具体的な労働が使用価値をつくりだしているといった程度の認識レベルなら、それは、古典派経済学にもよく知られた労働価値説の、いわば常識に属する類いであったと言えるだろう。では、「決定的な点」、「最良の点」とマルクスに自覚させた真に独創的な新機軸とはどのようなものであっただろうか。この点にかんして、古典派経済学に独自で通有な、曖昧で不徹底な弱点を、マルクスは『資本論』第1章第4節の注31において、次のように総括している。

「古典派経済学は、価値に表される労働と、生産物の使用価値に表される限りでの労働とを、どこにおいても、明文によっては、また明瞭な意識をもっては、区別していない。もちろん、実際には区別を行っている。なぜなら、古典派経済学は、労働を、あるときは量的に、あるときは質的に、考察しているからである。しかし、古典派経済学は、諸労働の単なる量的区別がそれらの質的統一性または同等性を、したがってまたそれらの抽象的人間労働への還元を前提とするということに思いつかなかったのである」(訳(1)136/94)。

旧来の古典派的把握との分岐は、商品交換 = 等値の関係なるものを仲立ちとした、現実の具体的諸労働から同等な抽象的人間労働への還元、「抽象的労働」という価値実体の抽出、にあった。すなわち「労働の二重性」把握を徹底した点にある、とあってよいだろう。「商品に含まれている労働は、使用価値との関連ではただ質的にのみ意義をもつとすれば、価値の大きさ

3) 留意されるべき点は、抽象的労働の抽出・還元の必要・必然性が、交換関係の仕組み自体の中に、物的客観的に具わっているということだ。「抽象的労働」は“抽象的思考力”を駆使して導きだされた“分析的”諸規定であるが、“抽象”“抽出”手続きの産物だからといって、そのことからこれらの規定を、「理論範疇」と看做したり、物質的な基礎から裁ち切られた非物的で“観念的な所産”だと見るのは、誤りである(後述)。

との関連では、それがもはやそれ以上の質をもたない人間的労働に還元されているので、ただ量的にのみ意義をもつ」(訳(1)77/60)とマルクスは述べている。そこでも表明されていたとおり、「スミスやリカードなどにおけるような単なる労働への単なる分解は、至るところで不可解なものにぶつからざるをえない」(既出, 1868年1月8日付けエンゲルス宛手紙)。以下、もっとも重要な諸論点について概観しよう。

(2) 「労働の二重性」把握と剰余価値論の突破

マルクスの研究足跡を跡づけてみると、商品交換の部面から生産の領域に、価値増殖過程に、分析の歩みをすすめた際、「労働の二重性」の認識を試す最大の機会に遭遇している。古典派経済学が、ほかならぬその把握を欠いていて未達だったゆえに乗り越えられなかった難問に、マルクスは挑んだ。価値増殖過程(剰余価値論)を仕上げると同時に、二重性理解の深化を成し遂げるのである。この把握の獲得に、確信を深めたにちがいない——「決定的な点」、「最良の点」として。

1857 58年草稿『経済学批判要綱』において、剰余価値論の主題のもとに「シーニアの最終一時間」説の論駁、ならびに、再生産論の主題下に「不変資本の再生産」を捉えそこねた「スミスのドグマ」説が打破される。この旧説批判の二つの事例は、理論の分析装置(武器)の有無によって理論展開の帰趨が決定的に左右されることをしめすよき例証として、二重性把握の重要性を際立たせている⁴⁾。以下、概要をたどってみよう。

1) 「シーニアの最終一時間」説の論駁 問題の提起と解決

マルクスは『経済学批判要綱』「資本にかんする章」において、資本主義的商品の価値諸成分($c + v + m$)の分析に向い、新たに付け加えられる労働による価値増殖過程($v + m$)をまず明らかにしたのちに、次いで、生産手段価値つまり不変資本価値($+ c$)について以下のように問題提起をする。

賃金と利潤の二つの部分からなる一労働日 [$v + m$] において、「では、労働材料と労働用具とに実現されている資本の部分 [c] はどこに残っているのだろうか?」、「資本の構成部分としての用具や材料は、労働が補填しなければならない価値なのであるか?」[「一労働日の付加価値分の」ほかに労働者は用具・材料の価値をいったいどのようにつくりだすの

4) 第2節の本論題 [マルクスによる「労働の二重性」把握の、「シーニア説」および「スミスのドグマ」説に対する両面批判の意義と経緯] の考察については、峯岸興治「マルクス「労働の二重性」の発見 『経済学批判要綱』から『資本論』へ」(ディスカッション・ペーパー、『メガ』第II部完結記念シンポジウム『資本論草稿研究の新知見』[マルクス・エンゲルス研究者の会・東京学習会議主催] 2014. 3. 29.) に詳しい。本稿での観点と整理も、峯岸労作に多くを負っている。

か？」と（『草稿集』 447-448頁）。

この提起の契機をなしたのは、古典派における D. リカード対 N. W. シーニアの論戦であった。リカードが、商品生産物のなかの不变資本部分（ c ）を、——「スミスのドグマ」の思考方式に倣って——賃金・利潤・地代の諸収入につまり付加価値（ $v + m$ ）に解消させてしまうのに対して、シーニアは、生産物に含まれる不变資本もまた新たな付加労働によって作りだされるほかに、付加労働の可除部分を割り当てて理解するべきだ、と応酬した。このように価値増殖過程の分析作業は、ことの発端から、リカード派の「スミスのドグマ $v + m$ 」対シーニア派の「剰余は最終の1時間」説、という古典派経済学の二大課題——彼らには元来解決不能な難題——との対抗と向き合うかたちをとったのである。

マルクスは問題点を絞り込み、次のように打開の途を拓く。労働者による付加労働が、不变資本価値を無償で新生産物に移転するという作用は、その「労働の質」の側面の作用効果以外にありえないことに着眼する。

「原料と用具に含まれている労働時間が同時に〔新生産物に〕保持されるのは、労働の量の結果ではなく、労働一般としての労働の質の結果である。……資本は、この質を労働者との交換において、すでに買いとってしまっている」（同『草稿集』 455頁、下線はマルクス）。

「生きた労働が、材料のうちに自己を現実化することによってこの材料そのものを変化させ、したがって労働の目的によって、労働の合目的活動によって規定された変化……をもたらすのであるから、材料は一定の形態で保持され、素材の形態変換は労働の目的に順応するのである。労働は、生命のある造形的な火である。」（『草稿集』 456, 457頁）

後年『資本論』（第1巻第3篇第6章）に引き取られる当該論点の把握が、ここにはじめてきり拓かれた。『資本論』は言う、「目的にそくした生産活動〔具体的有用労働〕としては……労働は、ただ接触するだけで生産手段を死からよみがえらせ、それらに精気を吹き込んで労働過程の諸要因にし、これらと結合して生産物となるのである」（『資本論』訳(2)341-342/215）。『資本論』に書き込まれたのと遜色のない成熟した認識を、ここに確認することができよう。

2) 「スミスのドグマ」批判 「不变資本の再生産」問題の打開

うへの理論の前進は、用具・材料の資本価値がだれの手でどのようにもたらされるかを明らかにするが、それは同時に、古典派経済学が例外なく陥っていた困難「スミスのドグマ」について、打開し批判する道筋をも拓くことになった。というのも、「ドグマ」は、「不变資本 c の再生産」説明という同じ対象課題についての別角度のアプローチによる立論だったからである。

A. スミスによれば「各個の商品の、したがってまた社会の年生産物を構成する諸商品のい

っさいがっさいの価格または交換価値は、労賃、利潤、および地代という三つの構成部分から構成されるとか、それらの構成部分に分解される」と定式化される。これをマルクスは、「ドグマ [Dogma, 教義]」と呼び（『資本論』第2部第19章第2節、訳(7)587/370）、後年の草稿において誤謬の根を次のように突き止める。一つには、年々の「生産物価値 [c + v + m]」と年々の「価値生産物 [v + m]」との「同一視」によって不変資本部分 [c] を「追い出し」てしまったこと、いま一つには、その認識の根源には「労働の二重性」の区別を欠いたために、スミスが年生産物総体と年々の価値生産物との混同ないしは取り違えをおかしてしまった、と批判することになる（訳(7)599 600/376 377）。

このドグマは、古典派労働価値説の“集成的源流”ともいうべき意義をもった。すなわち、ドグマ命題には、のちに労働価値説の二大古典派潮流をかたちづくることになる「価格構成説」および「価値分解説」の、“萌芽”が埋め込まれている。マルクスの評言によれば、“俗流経済学への門戸をひらく堡壘”（訳(7)592/372）となったのである。

マルクスはこのドグマを、後年、『資本論』第2部のための遺稿「第8草稿」（1880年 1881年執筆）の改訂記述において、「価格構成説」および「価値分解説」の双方批判をもって最終的に総括した。それによって古典派労働価値説の残滓は一掃された⁵⁾。マルクスの晩年期にいたる四半世紀におよぶ「スミスのドグマ」説批判の研究作業の端緒と方向付けは、ここの『経済学批判要綱』に発する。「ドグマ」批判とシーニア批判との両面批判の武器となった「労働の二重性」把握、を嚆矢とするのである。

3) 小括。経済学批判体系の展開基軸としての「労働の二重性」

まとめよう。本節では、「労働の二重性」が『資本論』という経済学批判体系の展開の基軸をなすキー概念を形づくっていることを概観した。マルクスにおける「労働の二重性」の理論的把握は、リカード派對シーニア派の古典派論戦における焦点の一つであった難問を起点とする。スミスのドグマを継承したリカードが、商品生産物のなかのcをv + mに解消させてしまう「価値分解説」の主張を継承したのに対して、シーニアは、生産物に含まれる全価値したがってcもまた付加労働によって作りだされるとの理解から、生産物価値に付加労働時間を割り当てる「価格構成説」——「俗流への門戸をひらく出撃砦」（マルクス）——を主張した。しかし、いずれの陣営の主張も、「労働の二重性」把握を欠き、矛盾と不条理に陥る致命的欠陥を抱えることになった。二重性把握の欠如に直に起因する古典派にとっての“双子の二大誤

5) マルクスの草稿改訂史に沿って、スミスのドグマの批判的総括を古典派労働価値論の超克の歩みとして究明した文献に、宮川彰「もう一つの『資本論』ルネッサンス 第2部と第3部との矛盾、または労働価値論の常識を疑う」『季論21』第5号、2009年7月、および、同著「『資本論』第2部について スミス・ドグマ批判によるマルクス再生産論の形成」『季刊 経済理論』第51巻第2号、2014年7月。

謬” と言うべきものである⁶⁾。こうして、「労働の二重性」規定が、マルクス経済学批判体系＝『資本論』の諸範疇諸規定の礎石と基軸をなしていることが、理解されるのである。

3. 「労働の二重性」の超歴史的解釈の検討

1920年代ソ連における価値論論争では、「労働の二重性」のうちの「抽象的労働」概念の意味や意義付けにかんして解釈が分かれ対立し議論が重ねられた。主題のもとに多岐にわたる論議・論点の広がりを含みはあったのだが、ここでは、こんにち日本における「労働の二重性」論議に係わりの深いものに限ってとりあげる。続いて、見田石介の主張する「抽象的労働」の生理学的自然的解釈、を検討しよう。

(1) ソ連価値論論争における歴史的解釈派と超歴史派との対抗

本稿のテーマにそくして議論の概要をみておこう⁷⁾。『資本論』冒頭の商品章では、商品の交換に基づいて、諸使用価値の捨象と価値の抽出（第1節）、これに相応する具体的諸労働からの同等な「抽象的労働」への還元（第2節）、翻って価値の現象形態である「価値形態」（第3節）、この価値表現の關係に仕組まれた転倒的物化現象すなわち商品物神性（第4節）、が解明される。これら諸關係諸規定の解釈と性格付けをめぐって、議論が分岐対立してきた。

【社会学的解釈派と生理学的超歴史派との対抗】

価値の内実（内容）について、マルクスはそれを、「一原子の使用価値も含まない」と規定し、また「まぼろしのような対象性」（訳⁽¹⁾⁶⁴ 5/52）との言い回しで形容した。このことを重く汲みあげて、一方では、価値内実を、自然素材をみじんも含まないような純粋に社会的な抽象物と捉え、自然的要素や生理学的事実によって基礎づけすることを拒んで、それを「非物的・非物質的」なものと評する解釈の仕方が引き出された。そこからそれと連繫して、諸規定の母体としての交換〔価値表現〕關係に着目し、諸概念のまとう相対的な關係性を重視しようとする観点から、一連の“交換主義的”な解釈が、“物化・物象化現象”偏重の解釈ニュアンスを伴いつつ、提起されてきた。この立場は、「抽象的労働」概念を、商品「交換」という特殊歴史的な經濟営為にのみ固有な、社会的労働にとっての“關係性”表現だと看做して、「社会学的」に解釈しようとする傾向をもつと評された（代表的見解の提唱者を冠して「ルービン派」とも呼ばれる）。

6) 峯岸，前掲ディスカッション・ペーパー，8 10頁。

7) 竹永進前掲編訳著『ルービンと批判者たち』収録の、「編訳者解説」201 231頁におけるすぐれた論争整理に負うところ大きい。本稿では、見田所説点検へのリンクを意図するため、整理の視点は自ずと異なっている。

これに対抗して、他方の論陣では、“自然主義的解釈”が指向された。「抽象的労働」を、——『資本論』他でマルクス自身によっても容認されているとの見立てのもとに——「生理学的意味での人間労働力の支出」にまで還元し同化して捉えようとする。「抽象的労働」がおびる生理学的“同等性”のうちに、価値量測定のための資格特性をみいだして、生理的労働への“同化”または生理学的事実と相即して捉えるべきこと、を主張する。こうして「抽象的労働」を、人間労働一般に妥当しどの社会にもあてはまるところの、労働同等性を具現する超歴史的な普遍的な概念として、——前者の、“交換主義的”「社会学的」に解釈する立場に対抗して——「生理学的意味」に解釈しようとする流れが対置された（ダシコフスキー、サイゲーシュキン、コーエンら反ルービン派の論客が名を連ねる）。

注目されるべきは、この立場に共通な関心事だ。生理学的に同等性を担保された「抽象的労働」を抛りどころにして、社会的労働としての量的な尺度と計測可能性を見いだそうとするつよい問題意識だった。背景には、社会主義建設における社会総労働の均衡的計画配分という実践課題に促された動機付けがよこたわる。この観点は、「交換関係性」偏重の「物象化的」な解釈に傾斜して量的可測性問題で無力さをさらすこととなったルービン派に対する批判の眼目をなした。「社会学的」解釈の弱点に斬り込み、その観念論の色合いの論調を白日のもとに晒したのである。

【本稿の立場からの指摘点】

本稿の立場から指摘すべき諸点は次のとおりである。

第1に、物質的富の創出にあずかる経済の営みは、本来的に、物的、物質的である。使用価値素材からの捨象による「抽象的実体」であれ「まぼろしのような対象性」であれ、また交換「関係性」であれ、それらどのケースをとってみても、労働支出という社会的実体ないしはその成果の対象性をめぐる事象のことである。価値諸規定で“抽象的”“社会関係的”などのような性格を帯びるからといって、そのことが直ちに“非物的、非物質的”であることを意味するのではない。“抽象的・社会関係性”が即、“非物的、非物質性”なのではない。そのように短絡的に推論し解釈することは誤りである。

もう一つ指摘され得るのは、「社会学的」解釈派が陥ったような、逆の傾向である。自然的な要因・条件による基礎づけ・裏付け、または使用価値素材による経済的形態規定への関与を、排除し斥けて両者を遮断してしまう立場にたつこと、これもまた誤りであろう。財の有用性が商品体から離れて中空に浮かぶものでないのと同様に、価値／交換価値もまた、使用価値素材に担われるほかになく、物的財貨から離れてありえない、ということである。

第2に、価値をうみだす労働の「質」は諸属性の捨象された同等な「抽象的労働」であるが、その「量」はといえば、無差別な同等性に立脚する「社会的に必要な労働時間」を尺度とする。両者は区別されるべきものである。他面をみてみよう。「抽象的労働」の同等性規定は、交換

当事者らにとって「共通な第三者」であることは自明である。しかし、だからといってこの事情から、次のような見方を引き出すことは無理があり肯定できるものではない。すなわち、「生理学的」解釈派が陥ったように、一つには、その同等性規定のみに量的可測性の担保を見いだそうとすること、またもう一つには、生理学的自然性に付託して「抽象的労働」の非歴史的、超歴史的な普遍性を引き出してしまおうとする推論である。いずれも短絡的で不適切な誤った見方といわなければならない。

「生理学的」解釈派は、両者の混同・同列視に陥っている。この混同に起因して、二方面の偏向に傾斜した。一方で、「労働の量的可測性」を有資格根拠または誘引契機にして、「抽象的労働」の生理学的規定への同化、自然的事実との同一視をおしすすめたこと。他面では、いつの時代にも普遍的に妥当する非歴史的超歴史的な性格付けをこの概念に見いだすことになった。

後述の見田石介所説の点検でも触れるとおり、「抽象的労働」の自然事実的、生理学的解釈は、「社会的に必要な労働時間」なる本来の価値尺度を見失い、労働生産力諸要因と競争関係など重要な一連の市場関連諸作用を考慮できず、価値量測定ではまったくの無為無力に陥ったのである⁸⁾。

以上が、1920年代ソ連価値論論争についての、本稿のさしあたりの回顧総括の視点である。いくつか教訓を汲みあげながら、以下、こんにちわが国で行われている「労働の二重性」解釈論議の点検を試みてみよう。

(2) 見田石介説「労働の二重性」把握の超歴史的解釈の検討

わが国において「抽象的労働」の生理学的超歴史的な解釈の立場にたつて、歴史的解釈を批判してきた代表的所説は、見田石介である（『資本論の方法』弘文堂、1963年、および『見田石介著作集』第3巻「論理＝歴史説とマルクスの方法」大月書店、1976年）。以下、1. 「抽象的労働」の自然的実体化への改変、2. 抽象的労働の価値「転化」＝「総合」と看做す場合における同義反復、の二題目のもとに点検する。

1) 「抽象的労働」の自然的実体化への改変

まず本主題にかんする見田石介の基本的観点を一瞥しよう（引用番号と下線強調は引用者による）。

8) 価値を形成するところの労働の「質」と、その「量」尺度となる「社会的に必要な労働時間」とは、区別されるべきものである。鉄には「重さ」という属性があり[質を具え]、したがって幾ばくかの「重量」の鉄がある[鉄量をもつ]または幾らの「重量」があるか[もつか]を測ることができる、とすることができよう。「抽象的労働」という価値実体の質で、その量規定のための尺度である「社会的に必要な労働時間」の機能（measure と standard, モノサシとその目盛り）を果たさせること、代用させることはできない。両者を混同させることはゆるされない。以下で取りあげる見田石介は両者を識別できていないようだ。

(1) 「価値の分析をとってみると、同時に社会的労働としての意味をもつ抽象的労働は、なるほど価値を形成する労働そのものであるが、しかしそうした価値をつくる労働が何であるかは、それがさらに分析され、その要素としての抽象的労働と、社会的労働とのそれぞれの何であるかが明らかにされねばならない。……」(見田『資本論の方法』弘文堂、1963年、27頁)

(2) 「マルクスは価値の分析でまさにこのことをおこなっているのであるが、この価値の要素としての抽象的労働も社会的労働も、いわば超歴史的なものであり、また前者は生理学的なものにすぎない。こうした抽象的労働そのもの、社会的労働そのものにとっては、価値という形態をとることはどうでもよいことであって、それら自身のうちには価値にまで上昇する必然性は少しもない。価値の方はそれらを前提し、含蓄しているにしても、それらはすこしも価値を含蓄するものではない。もちろんこれらの非歴史的な抽象的要素が価値に発展するわけではない。しかしマルクスは、抽象的労働、社会的労働、それらの対象化という抽象的な諸要素を総合することで、すなわちそれから上昇して価値という歴史的な具体的なカテゴリーに到達したのである。」(同書、同所)

頻出する「社会的労働」とは何ものであろうか。見田の用語どおりによれば、「同時に社会的労働としての意味をもつ抽象的労働」、価値をつくる労働の「要素としての抽象的労働と社会的労働」、「抽象的労働も社会的労働も、超歴史的なもの」、「非歴史的な抽象的要素」(見田)、である。これらの関連を立ち入ってみてみると、マルクスの規定とは異なって、使用価値をうみだすのが具体的有用労働だとすれば、他面のほうは「価値をつくる労働」の「その要素としての抽象的労働と社会的労働」とされる。

すると、見田によれば、価値形成労働の構成は、——マルクスとは違って——「具体的労働」・「抽象的労働」・「社会的労働」という“三重性”をおびることになるか、または、「具体的労働」vs. {「抽象的労働」・「社会的労働」} のごとく“二層重ねの二重性”になるか、であろう。また、——マルクスの規定とは異なって——抽象的労働は生理学的な「要素」にまで還元、同化されて捉えられている。要するに、これらの諸特徴によって、——マルクスの「商品に表される労働の二重性」[第1巻第1章第2節表題]からは離れて——、価値をつくりだす労働の“三つ”の「要素」の基本性格が、生理学的規定を併せふくむところの「超歴史的なもの」として、描き出されている。言い換えると、「生理学的」自然的な性格をおびた「非歴史」性、そして、人類史のあらゆる時代社会に妥当する普遍的な「超歴史的」なもの、と看做す解釈が打ち出されているのである。

「社会的労働」をいまして注視してみよう。見田の諸規定ははたして齟齬なく平仄が合うのだろうか。見田は「社会的労働」について、「同時に社会的労働としての意味をもつ抽象的労働は、……価値を形成する労働そのものである」という。文字どおりここでは明白に、三者は

並立的な同格の位相に位置づけられている。だが、直後に続くフレーズでは、「価値をつくる労働」の「その要素としての抽象的労働と社会的労働」と記されていて、ここでは後二者は、上位の類概念に副属する下位の種概念のように、その「要素」に位置づけられている。これが**第1の齟齬**である（さきに諸要素の「三重性」かそれとも「二層重ね二重性」か不確定であるという点に現れていた事情だ）。だが、**第2に**、同格にせよ階層づけにせよ、それらは直ぐあとに続く「抽象的労働は生理学的なもの」と言明されていた規定とそもそも適合できるだろうか。つまり、前者の経済的社会的な範疇と後者の生理学的自然的な範疇に還元されてしまった規定とは、相容れないはず、併存または鼎立できないはずである。**第3に**、「価値の要素としての抽象的労働、社会的労働」（引用（1）（2））と言いつたように、「抽象的労働」が、それを価値の「実体 Substanz（内容）」であると措定したマルクスの規定とは違って、見田によれば、「価値をつくる労働……の要素」（引用（1））、あるいは、価値の「要素」（引用（2））というように、用語も言い回しも不統一のまま不用意に改変されている。こうした用語遣いの不確定性・曖昧さは、これらの「要素」が価値に「移行」、「転化」する際の「総合」推論の困難（同義反復問題）にも関係して来ることになるだろうが、この論点はあらためて次項で後述しよう。

見田は「社会的労働」について、すでに見たように「生理学的意味での人間的労働力の支出」というマルクスの規定を抛りどころにしながら、人間労働がいつの時代どの社会でもなんらかのかたちで協同的に営まれていて、どこでも“類的集団的な”社会性をおびているといった意味あい、人間労働一般と同じ意味を付託して用いており、その非歴史的「超歴史的」な解釈の裏付けの一環にしていたのである。しかし、この理解は、マルクスの題目での「社会性」規定とは異なっている。対象限定の方法論と価値形成労働の規定にかんしてマルクスの趣旨を確かめることができる。見てみよう。

「交換価値を生み出す労働の諸条件は、交換価値の分析から明らかなように、労働の社会的な諸規定 (*gesellschaftliche Bestimmungen der Arbeit*)、または社会的な労働 (*gesellschaftliche Arbeit*) の諸規定であるが、社会的というのは単純にそうなのではなく、特定の様式においてそうなのである。それは特殊な種類の社会性 (*eine spezifische Art der Gesellschaftlichkeit*) なのである。」(マルクス『経済学批判』岩波文庫訳28頁/Dietz Verlag Berlin 1968, S. 26. 下線強調はマルクス)

価値の実体をなす抽象的人間労働の、特殊歴史的な性格をおびた「社会性」について、マルクスは同じ主旨で、『資本論』第1章冒頭の章句において述べている。

「それら [交換に供された諸商品生産物] に共通な (*ihnen gemeinschaftlichen*)、社会

的な実体 (gesellschaftlichen Substanz) の結晶として (als Kristalle), それら抽出物 (sie) は諸価値 諸商品価値である」(『資本論』訳(1)69/52. 下線強調は引用者)

[* 初版の対応箇所のテキスト：「いろいろに違う諸使用価値においてただ違って表されるだけの、共通な社会的実体、それは——労働である。」“Die gemeinsame gesellschaftlichen Substanz, die sich in verschiedenen Gebrauchswerten nur verschieden darstellt, ist die Arbeit.” (MEGA, II/5, S.19/Z33 35)。 (訳, 大月国民文庫版『資本論第1巻初版』1976年, 25頁。下線強調は引用者) [初版では、価値をつくりだす「労働」に、第2版の改訂では、それが対象化された「価値」に、焦点が据えられた。そして、社会的労働の「共通性」の規定詞が、(初版では) gemeinsame から、(第2版の) ihnen gemeinschaftlichen に、用語改訂されている。なお、第2版のマルクスの「あと書き」には、「価値の導出はいっそう科学的厳密」(訳(1)15/18) をはかったと記されている。]

交換価値を生みだす労働の社会的な諸規定は、マルクスも限定したように「特殊な種類の社会性 (Gesellschaftlichkeit)」である。それは、生産力の一定の歴史的発展段階に対応して歴史的に現れ出てくるものであり、多かれ少なかれ“非共同社会的な”、すなわち、局部的であれ全局的であれ“私的所有的な”色合いを具えた歴史的な生産関係を条件とし、そこで成立する社会構成(体)の特質に照応している。「交換価値を生みだす労働」は、違った使用価値をもつ私的な諸商品生産物を「交換」によって、それらに含まれた労働の同等性で、結びつけるところの「実体」をかたちづくる。こうして、外見上ばらばらな私的労働の、背後に横たわる共同社会的な性格を支えるものとして、具体的な有用性を抽象[捨象]されたところの、抽象的な労働、同等な人間労働なのである、とマルクスは述べている。以上を踏まえると、抽象的労働、または抽象的人間的労働 abstrakt menschliche Arbeit は、商品経済的な社会構成の成立を前提条件として、そこで振る舞われる具体的な労働、つまり私的労働に固有な概念、であることがわかる。

「抽象的労働そのもの……にとっては、価値という形態をとることはどうでもよい」などに見田のとらえる見方は、マルクスの言説のどこからも読み取ることはできない。商品から切り離して単独で独り歩きさせること、見田の場合でいえば、抽象的労働を自然的要素に還元してとらえること、つまり“解体”してしまうことはゆるされない。以下に、その結末をみよう。

2) 「抽象的労働」の「対象化」は「総合」か

見田は、抽象的労働の「対象化」を、「抽象的諸要素を総合すること」とオーバーラップさせて見ているようである。どのような「総合」であろうか。『資本論』冒頭第1章第2節末尾のまとめには、周知のよく知られた段落章句がある。「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間的労働力の支出であって、この同等な人間的労働または抽象的人間的労働という

属性において、それは商品価値を形成する。すべての労働は、他面では、具体的有用的労働……」[既掲：訳(1)79/61]。これに付した見田のコメントがある。

(3) このように、労働一般は、抽象的労働と具体的労働との二面性をもっているが、私的生産という条件のもとでは、この抽象的労働が対象化し物化して価値となる。価値とはそうしたものだ、というのがマルクスの明らかにしていることである。/このことは、マルクスが「商品の物神性」で商品の物神性が価値規定の内容からくるものでないことを明らかにしている箇所をみると、いっそうはっきりとわかる。……」(同上『資本論の方法』, 85頁)

「総合」手続きにかかわって若干、指摘しておこう。

第一に、労働「対象化」を「総合」手続きとみなすことはできない、という点である。見田は別の引用(2)で、労働の「対象化」を「抽象的諸要素を総合する」手続きであるかのように看做している。労働の「対象化」とは、労働支出の営みそのものつまり働くというプロセスとその結果にすぎない。全一連の「過程」には起点と終点、インプットとアウトプットとの諸関連が連なる。労働の「対象化」とは、プロセスにおける起点・経過およびその終点の結果であり、「総合」の帰結でもなんでもない。見田のしるすように、「抽象的労働」を起点・経過に見立てて「要素」または要因化し、「対象化」の帰結終点の「価値」を総合手続きの成果として描き出すことには、違和感がのこる。方法論としての「総合」手続きの誤用ではなからうか。

第二に、労働の「対象化」に因果関連を付託することの奇異感である。「対象化」による「価値」の所産を、なにか新しい異質な合成体へ“上昇”“転化”し新しい質がうみだされたかのように描き出すことは、さらなる違和感がある。労働とその果実とを、要素とその合成物結果になぞらえ、そこにあたかも因果関連が横たわるように描き出すのは、無理がある。「総合」手続きの逸脱または濫用ではないだろうか。

この引用記述にかかわって、見田の誤読をただしておかなければならない。

引用の最後の一文にあるように、マルクスは第1章第4節の冒頭において、商品物神性は「価値の形態」に由来するのであって、「価値規定の内容からくるものでないことを明らかにした(訳(1)122/85)。見田は、マルクスの疑いもなく正しいこの引用の指摘の参照を指図しながら、自らの主張のどのような点の援護、擁護を狙ったのであろうか。「抽象的労働が対象化し物化して価値となる」というプロセスが、転倒的価値表現関係とは無縁に、生理学的自然的な労働力支出で担われているという点で、生理学的解釈にたつ自らの把握の「正しさ」を補強できると考えたからであらうか。しかし、そのマルクス記述への参照求めは、的を射ているであらうか。

第1に、「対象化し物化し」た抽象的労働はいまや「価値」をつくりだし価値の総りとして結実しているのだから、生理学的超歴史的解釈を援護、傍証することになるどころか、「はっ

きりわかる」ようになるどころか、むしろ反証とさえなっていたり現れている。

第2に、見田が参照を求めている当該のテキスト箇所では、マルクスは、物神的転倒の神秘性や奇異さが、価値規定の「内容」や価値「実体」に起因するのではないことを述べ、以下の理由を付している。その言明は、第2節末尾の、既出の要約一文と基調を同じくしている。

「というのは、第一に、有用的労働または生産的活動が互いにどんなに異なっても、それらが人間的有機体の諸機能であること、そして、そのような機能は、その内容やその形態がどうであろうと、どれも、本質的には人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官などの支出であるということは、一つの生理学的真理だからである」(訳⁽¹⁾122/85)

「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間的労働力の支出であり、同等な人間的労働または抽象的人間的労働というこの属性において、それは商品価値を形成する」(既出訳79/61)。

留意すべき第一の点は、すでに考察したように、いずれの自然的「生理学的意味での人間的労働力」への言及であれ、それらは、「労働の二重性」・「抽象的労働」についての自然的要素や条件による物質的な「基礎づけ」、「裏付け」に位置づけられるものである。自然的基礎づけを与えられるからといって、その概念や用語それ自体までもが自然的なものに還元帰着させられてしまうわけではない。第二には、俎上に載る「すべての労働」ないしは種々の「有用的労働または生産的活動」は、市場の空間的広がりの中で、同時期に繰り広げられる交換関係に入り込む諸商品であるという点である。違った社会構成体におよぶ長期にわたる歴史時間の隔たりのもとでさまざまな労働が相互に比較されるようなケースが俎上にのぼっているわけではなく、「資本論」では断りのない限り、もとより排除されていると見るべきだろう。

以上を踏まえると、第1章第4節冒頭において、マルクスが、物神性の転倒的神秘性の起因は「価値の形態」に由来するのであって、「価値規定の内容からくるものでないことを明らかにし」たということから、そのことから直ちに、見田が読み取って結びつけるように、「抽象的労働」の自然的生理学的解釈、自然的実体への還元をマルクスが許容ないしは承認した、という帰結をひきだすことはできない。否定することは直ちに裏返しの肯定を意味するわけではない。マルクスの論述文脈からはそのような解釈を引き出すことはできない

マルクスは、——先述したように——価値実体である抽象的労働について、「“社会的”実体」だと明言している。別の規定の仕方では、相異なる諸使用価値に担われ、それらを、有用性の捨象(=抽象) Abstrahieren を通じてはじめて相互に比較可能になるところの、“無差別同等な”、この意味で「抽象的に人間的な」労働 *abstrakt menschliche Arbeit* である、と明言している。「生理学的意味での人間的労働力の支出」は、この同等な「抽象的労働」にとっての自然的な基礎であり、“同等な”または“抽象的な”労働という「社会的実体」を裏付ける物

的根拠であるが、それ以上のものではない。この規定を「抽象的労働」と同一視し、「抽象的労働」を「自然的な生理学的なもの」へと還元したり、「自然的実体」であると読み出してしまふのは、不適切であり、短絡した誤った解釈だといわなければならない。

3) 「抽象的労働」の「総合」の帰結「自然的な労働の二重性」

見田は、商品交換の経験的事実から出発して、「価値をつくる労働」の「要素」としての「抽象的労働」と「社会的労働」の析出にいたるのだが、これに止まらない。さらに分析を突き進めて、これら要素の生理学的自然的性格や普遍的非歴史的な性格にまで還元、同化させて、もってこれら「要素」を超歴史的に解釈する途をひらいた。この作業成果を収めるために、これら「要素」の「総合」への「上昇」、「転化」の手続きを、見田はどのようにすすめるであろうか。見田による方法（手法）を垣間見せる主張を一瞥してみよう（『見田石介著作集』大月書店、1976年、第3巻「論理＝歴史説とマルクスの方法」、93頁より、/は改行をしめし、[]内は引用者の補足）。

(4) 「こうした誤った自然的なものの嫌悪 [歴史的解釈派の] は、抽象的労働の場合にも同じように現われる。すなわち価値を、その内容、その実体をなす抽象的労働から理解すること、つまり抽象的労働から価値への移行は、この立場では発展でなければならぬから、抽象的労働は価値という社会的、歴史的なものに発展しうのような、やはり社会的なもの、ブルジョア的なものでなければならない、と言わざるをえないし、また事実そう主張される。なるほど抽象的な労働がそうしたものであれば、価値に発展することもできよう。しかしこれもいまみた使用価値の場合と同じことであって、同語反復であり、分析の拒否である。というのもそうした社会的な性質を持った抽象的労働とは何であるかといえ、それはとりも直さず価値だからである。価値とはそうしたもののことである。だからそれは価値は価値になる、という無意味なことを言っているか、もしくはマルクスが価値を分析したのをもう一度表象としての価値にもどしてしまうことかである。

のちに言及するように、うえの批評コメントは、見田自身の自然的超歴史的解釈のケースに跳ね返ってあてはまるのであるまいか。見田の理解する [自然的] 「抽象的労働から [歴史的] 価値への移行」を辿ろうとすると、まさしく「同語反復」に陥るのである。『資本論』における上向法認識の手続きは、「無意味」な後戻り手続きではない。抽象的労働なる抽出の分析成果を契機にしつつ、端緒範疇だった表象としての交換価値・商品にたちもどり、もう一度それを「再生産」する作業である。とはいえ、再帰の途では、出発点の曖昧で不分明だった表象ではなく、具体的に豊富な内容と関連づけを盛り込んで理論的認識の映像に再生産されてもどるのであるが。

「人間の労働が一定の使用対象をもたらす合目的な活動としては具体的労働であり、筋肉、神経の支出としては抽象的労働であるという事実は、労働がいかなる歴史的生産様式のもとにあり、いかなる社会的形態をとろうと、永遠に変わることのない自然的な事実である。過去の社会において、あるいは未来の社会において、労働が一面において具体的労働であるにしても、他面においてこうした抽象的労働でなくなるような事態があったわけでも、あるわけでもない。……しかもこの労働の二面性は、たんに客観的にそうであったばかりでなく、過去においては主観的にも人間に意識され、強い関心をもたれ、それに従って人間社会の総労働が各生産分野に配分されてきた。……だが私的生産という条件のもとでは、したがって人間がもはや社会的総労働を意識的に配分できなくなった条件のもとでは、この自然的な抽象的労働の対象化は、一見、奇妙にも、だが当然ながら [!?]、社会的実体 価値に転化する [?]。なるほど価値は社会的なもの、しかも一定の歴史的な社会的なものである。が、その実体そのものは、その内容は、どこまでも自然的な生理学的なものである [!]。……

「抽象的労働」を、筋肉、神経の支出として生理学的な「自然的な事実」にまで還元・同化することは不適切である。生理学的自然的な事実は、「抽象的労働」にとっての自然的基礎、自然素材による物的裏付けでしかない。もし、実体内容が自然的生理学的なものである以上、その形式（形態）である価値そのものもまた生理学的な自然性をおびることは避けられないこと、自明である。「自然的な抽象的労働の対象化が、社会的実体 価値に転化する」という見田が提示する論理的架橋の中味は、慎重に点検されなければならない（後述）。

「/ 抽象的労働は近代社会においてすでに眼に見えるものとなつたとすれば、将来の社会においては、人間の能力も職業もいよいよ固定化されなくなり、それがいよいよ感覚されるものとなることは明らかであるが、その場合、われわれは抽象的労働そのものを社会主義的なものと言わないだろう。それと同じことである。価値の概念に到達するためには、その自然的な実体たる抽象的労働を自然的実体として捉えることがその第一の条件であって、これを社会的、歴史的なものだとすれば、価値なるものは得体の知れぬものとなる。マルクスが商品の分析を自然的な労働の二重性にまでさかのぼってやったこともまるで無意味になるのである。」（『見田石介著作集』第3巻、93-95頁）

こうして、見田はマルクスから離れて、「商品に表される労働の二重性」（第1章第2節表題）の代わりに、ついに「自然的な労働の二重性」を対置するにいたる。ここに、端的にマルクス誤解と改変とが示されている。

4) 「抽象的労働」の価値「転化」 = 「総合」と看做す際の同語反復

最後に、見田の「自然的な抽象的労働」、「自然的な労働の二重性」解釈が同語反復におわるということを示そう。見田のテキスト常套句と同じ言い回しの、簡潔で平易な文章を見よう。

(5) 「あらゆる生産に共通な『生理学的意味での人間的労働力の支出である抽象的人間労働は、商品生産という歴史的条件のもとにおいてはじめて価値の実体となり、……商品生産の発展にともなってさまざまな価値形態をとってあらわれる。』（『社会科学総合辞典：新日本出版社、1992年、「実体」の項目説明より。下線強調は引用者）

「私的生産という条件のもとでは、……自然的な抽象的労働の対象化は、……社会的実体価値となる」。「あらゆる生産に共通な自然的な抽象的人間労働は、商品生産という歴史的条件のもとにおいて価値の実体となる」。——これが、見田の繰り返し描き出すキーフレーズである。自然的な抽象的労働を「抽象的諸要素を総合する」ことを通じて、歴史的な概念である価値に「移行」「転化・発展」させるテコは、「私的生産」もしくは「商品生産」である。では、「私的生産という条件」は、「商品生産という歴史的な条件」は、どのように成立するか？

「ある使用対象が可能性からみて交換価値である最初の様式は、非使用価値としての、その所有者の直接的欲求を超える分量での……定在である。……その譲渡されうる物の私的所有者として、……そのような互いに他人である関係は、自然発生的な共同体の成員にとっては、実存しない。商品交換は、共同体の終わる所で、諸共同体が他の諸共同体または他の諸共同体の諸成員と接触する点で、始まる。しかし、諸物がひとたび対外的共同生活で商品になれば、それらのものは反作用的に、内部の共同生活で商品になる。」（『資本論』訳(1)150/102)

この周知の、商品交換の論理的 = 歴史的な端緒をふまえれば、見田のキーフレーズ「私的生産という条件」、「商品生産を行う条件」も、独立した外生的なインパクトとは看做しえない。「私的生産」も「商品生産」も、それらに直接先行するところの、生産物の商品への転化、共同社会の非共同社会への転化、を出自ルーツとしている。共同体における共同的生産 (= 社会共同的所有) の紐帯 (所有諸権原の行使) の専一的な統治支配が妥当しなくなり、外部・内部にたいして、非共同社会的な、多かれ少なかれ大小範囲の、私的な生産および所有が行われるようになる。私的労働の社会性は、商品生産と商品交換とを通じて確認されるほかなくなる。「私的労働」と「商品生産・交換」とは、共同社会的ないしは公的な、生産・所有の否定された帰結、反対物である。

したがって、私的生産 (商品生産) を行う条件とは、生産物が直接にそれ自体として社会性

を維持できず、「等価物」を媒介にしてつまり交換価値を具える商品として交換されざるをえなくなる、ということと同義である。共同社会的な生産に代わって労働が二重性をおび私的労働として現れて商品をつくること、「抽象的労働」が価値をつくることを、意味する。前者「私の商品生産」が条件となって後者の「自然的な抽象的労働」の価値づくりを、価値実体への「転化」を、もたらすわけではない。「抽象的労働」が価値への「移行」や「転化・発展」を条件づける契機となるのでもなければ、前者の後にたいする因果関係にたつわけでもないのである。

この文脈を踏まえるならば、見田による、「抽象的労働」の“価値実体化”の説明は、「同語反復」の問題点が浮かびあがる。最後に、その疑念コメントを投げかけておこう。

確認されたように、見田は自稿のあちこちで、「私的生産という条件のもとでは、この抽象的労働が対象化し物化して価値となる」、「抽象的人間労働は、商品生産という歴史的条件のもとにおいてはじめて価値の実体となる」と述べている（『資本論の方法』、85頁、『見田石介著作集』第3巻93-95頁）。このことの意味するところは、——逆にみれば——、「私的生産〔商品生産〕という条件」を欠くもとでは、つまり価値生産の条件を備えないもとでは、労働は価値をつくりださない、というだけの話である。要するに、「労働は、価値をうみだす生産関係の条件のもとでは、価値をつくり〔「抽象的労働」が価値実体に転化し〕、価値をうみだす条件のないところでは、価値をつくらない〔「抽象的労働」は価値実体に転化しない〕（！）ということに帰結する。——これが「同語反復」でなくしてなんであろうか。さきに見田が、歴史的解釈派に投げかけていた指摘は、そのまま自らに跳ね返っている。

見田の唱える生理学的「抽象的労働」のリアリティはどうであろうか。「私的生産という条件のもとではじめて」価値実体となる、価値をつくる、のならば、そうでない原始共産制や自営の自足的経済を営む場合、さらには将来社会のもとでは、「抽象的労働」は潜在的に在るにはあるけれども現れはしない、ことになるのだろうか。それとも、ソ連の論争で動機付けをなしたように、社会主義的な計画経済計算の尺度としてますます重要度、必要度を増して現れるのだろうか。次節では、この事情の示唆を、マルクスのテキストから探ることとしたい。

（3）市場における「社会的必要労働時間」の評価 生理学的解釈の盲点

見田石介は「労働の二重性」、「抽象的労働」をどこまでも徹底して自然的要素に還元させて捉えようとする。既出引用を再掲しよう。「人間の労働が一定の使用対象をもたらす合目的な活動としては具体的労働であり、筋肉、神経の支出としては抽象的労働であるという事実は、労働がいかなる歴史的生産様式のもとにあり、いかなる社会的形態をとろうと、永遠に変わることのない自然的な事実である。」「価値の概念に到達するためには、その自然的な実体たる抽象的労働を自然的実体として捉えることがその第一の条件であって、これを社会的、歴史的なものだとすれば、価値なるものは得体の知れぬものとなる。マルクスが商品の分析を自然的な

労働の二重性にまでさかのぼってやったこともまるで無意味になるのである」(前掲, 『見田石介著作集』第3巻, 93-95頁)。

周知のように、マルクスは商品を、ブルジョア社会の「富の要素形態 Elementarform」(訳(1)59/49)と看做して「経済学批判」の“端緒範疇”に位置づけた。要素形態をかたちづくる二つの要因 Faktoren, 「使用価値」および「価値」, の析出を踏まえて、第1章第2節では表題「商品に表される労働の二重性」と銘打って、「商品に含まれる労働の二面的性質」の分析をすすめている。「要素」とは、すなわち生命有機体の細胞に相当する、これ以上分解できない生命組織体の“単位”である⁹⁾。もちろん、経済的諸規定の自然的「基礎づけ」ないしは自然的素材・条件による「裏付け」の考察は、必要である。だが、こうした自然的要素や条件による基礎づけ、裏付けで確認する手続きは、それを経済的形態規定性そのものと混同したり同列視し同化してしまうような、誤った操作や見方とは区別されなければならない。マルクスにあっては、「労働の二重性」はつねに、商品を組成するところの本質的な二要因と結びつけて分析されている。この商品にかんする生産と交換の関係を基礎の枠組み [パラダイム] として、——自明なことではあるが——商品にまつわる諸規定の特殊歴史的な性格付けや歴史的に独自の形態規定性もまた基本的に刻印されるのである。

見田が徹底化を主張するように、「労働二重性」ないしは「抽象的労働」を、「商品に表される」または「商品に含まれる」という連繫から切り離して、それら自体を「自然的な事実」、「自然的実体」にまで還元・同化してしまうことがどのような不都合をもたらすかは、先述でその一端を明らかにした。諸規定諸要素の「総合」の手続きに際し出来る母体復元の困難性である。諸規定を「総合」して母体にまで再生産させる“上昇・転化の契機”を喪失し、同義反復に陥ってしまうことが指摘された。最後にここでは、労働量の可測性にかんして出くわすもっとも複雑で深刻な困難を、指摘しておきたい。

価値量規定の拠りどころが、同等な「抽象的労働」を踏まえた「社会的に必要な労働時間(量)」であることは既述した。まさにこの規定において、生理学的な「抽象的労働」または「自然的な労働の二重性」把握が、複雑な市場諸関連に対応リンクできないのである。市場の競争場裡で複雑な修正や評価替えの対応調整をよぎなくされるところの、「社会的必要労働時間」尺度に、即応できないという問題である。二つの方面でこの規定の不備不全が現れる。一つは、[(a)] 部門内競争のもとで、生産力の増強が「強められた労働」として評価替えして現れるところの、特別剰余価値の生産の際の尺度にかんして。もう一つは、[(b)] 市場全体を舞台として繰り上げられる部門間競争において、利潤率均等化の法則の作用のもとで「修正

9) その含意は、これ以上分解がすすめば、たんなる分解に止まらず、ある組織体の「解体」ひいては破壊に繋がりがかねない操作となるであろう。細胞の諸要素を、アミノ酸やタンパク質にまで分解することはできたとしても、後者から「総合」して生命を復元すること、つくりだすことはまだ不可能である。

された価格」すなわち「市場生産価格」で体现されるところの、「別の意味の社会的必要労働時間」の尺度にかかわるものである。

(a) 部門内競争における生産力増強と「強められた労働」

『資本論』第1巻冒頭第1章第1, 2節では、労働生産力と価値との間の関連について次の諸規定で明らかにする。価値量の規定では、「標準的な生産条件および労働の平均的な熟練度・強度」のもとで「社会的に必要な労働時間」を尺度として計算される(訳(1)66/53)。一方、「労働の生産力」は、主に、「労働の熟練度、科学とその技術的応用程度、生産の社会的編成、生産手段の規模・性能、および自然諸関係」を規定要因とし(1)68/54)、「所与の時間内での合目的生産的活動の作用度」としてだけ認められ、「有用的具体的労働の生産力」として規定される(1)78/60)。したがって、「一商品の価値の大きさは、その商品に実現される労働の量に正比例し、その労働の生産力に反比例して変動する」(1)69/55)という価値と労働生産力とにかんする鉄則(基本的命題)が導かれる。ここから以下の諸論点が提起される。

第一に、うへの命題ないしルールの別様の際立った現れであるが、「使用価値総量を増大させる生産力の変動は、もしその生産に必要な労働時間を短縮させるならば、増大した使用価値総量の価値を減少させる」(1)79/61)、という関係である。使用価値素材つまり生産物総量を増大させながら、それにもかかわらず価値量を減少させることさえありうるという逆説的現象である。「抽象的労働」の生理学的自然的な把握に基づいた「同等性」を根拠とする尺度で、そしてその「同等性」尺度の目盛りだけで、はたしてこのような市場での相反的な価値変動の展開を捉えることができるだろうか。

使用価値量とそれに担われた価値量との相反的な動きを繋ぐものは、生産力と、それを実現する市場の諸条件・諸要因、ならびに、それらを反映する価値量尺度である「社会的必要労働時間」の変動、である¹⁰⁾。見田の「自然的な労働の二重性」もしくは「抽象的労働」の生理学的理解によっては、価値量規定の際の市場における基本的な仲立ち諸要因の関連づけが、見通せない。いまの場合では、生産力諸要因の市場での競争を介して波及してくる実効諸作用ならびにこれらを集約して規定されてくるところの、社会的必要労働時間との照合、という価値量を測定評価するもっとも基本的な媒介ロジックの関連づけが、抜け落ちてしまうのである。「自然的な労働の二重性」把握では、それらの市場経済に固有な媒介諸環を掬(すく)いあげることにはできないであろう。

第二に、自然的な「労働二重性」解釈では、生産力増大による「特別剰余価値」の評価に関与できないという、もう一つの決定的な困難である。『資本論』第1巻第4篇では「相対的剰

10) 因みに、言及された相反の事例は、市場の諸条件諸要因は不変のままの想定のもとに、生産力が倍加しかつ社会的必要労働時間が低下する、というケースである。さらに、これらのより複雑なさまざまな組合せがあることは言うまでもない。

余価値の生産」が個別的資本の場合に具現される現れ方として、「特別剰余価値」(=社会的価値と個別的価値との差益)の成立の仕組みが、以下の通り解きあかされている。

「一商品の現実の価値は、その個別的価値ではなく、その社会的価値である。すなわち一商品の現実の価値は、その商品が個々の場合に生産者に実際に費やさせる労働時間によって測られるのではなく、その生産に社会的に必要な労働時間によって測られる。」(訳(3)554/336) / 「例外的に生産力の高い労働は、強められた労働 potenzierte Arbeitとして作用する。すなわち、同じ時間内に同じ種類の社会的平均的労働よりも大きい価値をつくり出す」(訳(3)555/337)。

さきの第一の場合が、生産力変動の価値規定への作用をめぐる一般的パターンだとすれば、この第二の場合は、剰余価値成分への作用をめぐる特殊応用ケースである。「抽象的労働」の生理学的把握の制約は、ここでいっそう具体的に明瞭となる。生産力の高い労働が「強められた労働」として発揮される仕組みである。その一つには、生理学的自然的解釈では、労働時間をめぐる競争的な市場諸関連の集約的定式である、(個別的な必要労働時間 < 「社会的な必要労働時間」)に言い及ぶことができない。二つには、「同じ時間内に同じ種類の社会的平均的労働よりも大きい価値をつくり出す」という価値量評価に関説できない、という困難に達する。この特別剰余価値の儲けが、どこからどのように生じるか、だれが生産するのか? に答えることができないのである。価値の評価と量測定のかなめ点を説明できないのは、致命的欠陥と言わざるをえない。

(b) 部門間競争における社会的欲求と「別の意味の社会的必要労働時間」

『資本論』第1巻では第3章(第2節「流通手段」)において“命がけの飛躍”(売り)が描写され、また——類似の趣旨で——第3巻では第6篇にて「別の意味の社会的必要労働時間」への拡充について論及がある。一連の競争的な市場諸関連をブラック・ボックスに封印してしまう生理学的自然的解釈派にとっては、もっとも縁遠く、視野にもおさめえず、論じ究めることのできない難点である。指摘しよう。

1) まず、第1巻第3章第2節「流通手段」における“命がけの飛躍”(売り)の描写より。商品の価値規定・実現にとって、その貨幣所有者[買手]にとって使用価値でなければならず、市場の社会的欲求を満たすものであることが前提となる。ここから幾えにも市場条件が立ちただかってくる。

「[1] かりに労働が……, 社会的分業の承認を受けた一分肢であるとしても、それだけで

リンネルの使用価値が保証されているわけではない。リンネルにたいする社会的欲求が……彼の競争相手によってすでに満たされているとすれば、彼の生産物は、過剰となり、余分となり、したがって無用となる。…… [2] こんどは、……彼は、彼の生産物に、社会的に必要な平均労働時間だけを支出したとしよう。ところが、……彼の背後で、……リンネル織布業の生産諸条件が激変した。きのうまでは、リンネルを生産するのに社会的に必要な労働時間とされてきたものが、きょうはそうではなくなる。…… [3] 最後に、市場に出回っているリンネルのどの一片にも、ただ社会的に必要な労働時間だけが含まれているものと仮定しよう。それにもかかわらず、これらのリンネル片の総計が過剰に支出された労働時間を含むことがありうる。もし市場がリンネルの総量を、標準価格で吸収できないならば、そのことは、社会的総労働時間のあまりにも大きな部分がリンネル織布業者の形態で支出されたということを証明している。その結果は、ちょうど一人ひとりのリンネル織布者が彼の個人的生産物に社会的に必要な労働時間以上の労働時間を費したのとおなじことである。……どの1エルの価値も、同等な人間の労働の社会的に規定された同じ分量の物質化にほかならないのである。」(訳⁽¹⁾181 183/121 122, [] 付き数字, 下線強調は引用者。)

以上の引用文中の [1] ~ [3] のケースは、商品経済一般において使用価値または社会的欲求という前提のあり方が、価値規定（「社会的に必要な労働時間」の規定）にどのように影響をおよぼすかの [第 1 巻での] 考察である。市場での平均的な「標準価格」相場をきめるもの、市場価格の変動の求心力をかたちづくるのが、「社会的に必要な労働時間」である。そしてこれは、ある一商品にたいする社会的欲求をみだすところの使用価値総量をうみだすのにふさわしい、社会的総労働時間のうちの比例的割り当ての時間分量として規定され、部面ごと個別商品ごとの価値量規定の尺度「社会的に必要な労働時間」として作用するのである。この意義は、商品の標準価格での売買は、市場の社会的欲求に照応した「社会的必要労働時間」による価値規定を具現しているということである、すなわち、使用価値があるというおなじみの前提条件の充足の表現となっている、ということである。

これと呼応して、第 3 巻には、重なる観点と同じ趣旨で、以下のような究明がある。部門間競争が行われ利潤率の均等化および「生産価格」が成立するという、資本主義的市場を舞台とした「価値法則のいっそう展開された表現」、の見取り図が俯瞰される。さきの使用価値前提が、ここ [第 3 巻] では、「別の意味」の社会的必要労働時間として拡充されたかたちで適用されることとなる、という論旨である。「抽象的労働」の生理学的解釈にとって盲点となる決定点でもあり、長くなるが引用しよう。

2) 「社会的分業は、特殊な物品を生産するために、特殊な物品に対する社会の特殊な欲求を満足させるために必要な労働である。この配分が比例を保っていれば、異なる生産物

群がそれらの価値どおりに（さらに展開した場合には、それらの生産価格で）、販売される。これこそ、実は、個々の諸商品または諸物品との関連においてではなく、分業によって自立化させられた特殊な社会的生産諸部面のそのときどきの総生産物との関連においてははっきり現れる価値の法則である。それゆえ、たんに個々の商品に必要な労働時間だけが費やされているだけでなく、社会的総労働時間のうち必要な比例的分量だけが異なる諸〔生産物〕群に費やされているのである。というのは、使用価値であることが依然として条件だからである。しかし使用価値は、個々の商品の場合には、その商品それ自体がある欲求を満たすということに依存するとすれば、社会的生産物総量の場合には、その生産物総量がそれぞれの特殊な種類の生産物に対する量的に規定された社会的欲求に適合しており、それゆえ、労働がこれらの量的に限定されている社会的諸欲求に比例して異なる生産諸部面に比例的に配分されている、ということに依存する。（この点は、異なる生産諸部面への資本の配分のさいに論じられるべきである。）社会的欲求、すなわち社会的力能としての使用価値は、ここでは、社会的総労働時間のうち異なる特殊な生産諸部面に帰属する割り当ての諸時間を規定するものとして現れる。しかしこれは、すでに個々の商品の場合に現れるのと同じ法則にほかならず、すなわち、個々の商品の使用価値はその商品の交換価値の、それゆえ価値の前提であるということである。……たとえば、比例から見て多すぎる綿織物が生産されているとしよう——この織物の総生産物の中には、与えられた諸条件のもとで、その生産のために必要な労働時間だけが実現されているにもかかわらず。ところが、一般に、この特殊な部門では多すぎる社会的労働が支出されているのである。すなわち、生産物の一部分は無用である。それゆえ、その全体は、あたかもそれが必要な比例で生産されたかのようにしか売られない。社会的労働時間のうち異なる特殊な生産諸部門に費やされる割り当ての諸時間のこの量的制限は、価値法則一般のいっそう展開された表現にほかならない、——ただし、必要労働時間はこの場合には別の意味を含んでいるのであるが。それは、社会的欲求を満たすには社会的労働時間のうちこれこれの時間が必要であるというだけのことである。この場合、制限は、使用価値を通してはいり込む。社会は、与えられた生産諸条件のもとでは、その総労働時間のうちこれこれの時間をこの個々の生産物種類に費やしうるだけである。」（訳⁽¹²⁾1117 1119/648 649、下線強調は引用者）

マルクスの明瞭なメッセージが読み取れよう。資本主義的市場では、平均利潤率を求心力とした部門間競争が行われ、利潤率の均等化作用を通じて、価値から離反した「生産価格」が成立する。これが市場価格の平均的相場をなす、すなわち「市場生産価格」として価格変動の収斂する相場、いわば“磁場”をかたちづくる。このことによって、社会的分業の生産諸部面が担うところの、社会的欲求に照応した総生産物の比例的総量と、それをうみだすのにそのときどきの生産力に見合った「社会的総労働時間のうち必要な比例的分量」が、規定される。そし

て、資本主義市場ではこの後者が、拡充された「別の意味」の社会的に必要な労働時間として、たち現れるのである。

マルクスは次のことを明らかにしている。「価値どおりに (さらに展開した場合には、それらの生産価格で)、販売」という関係は、「異なる生産諸部面への資本の配分のさいに論じられる」利潤率均等化の作用の所産であるが、この事情は、「社会的総労働時間のうち必要な比例的分量だけが異なる特殊な社会的生産諸部面に費やされる」という「価値法則のいっそう展開された表現」だという。すなわち、均等化の結果価値から離れて成立した生産価格または市場生産価格は、「別の意味の社会的に必要な労働時間」の量的評価の裏付けを得て、社会的総労働時間にリンクされそこに組み込まれる、すなわち社会的承認を得る。「平均利潤」という[費用価格に付加される剰余の]“乖離”成分が現れるとしても、“乖離”外観で現れるにもかかわらず、けっして観念や理念の幻想物でなくまたたんなる利ざや付け足しでもなく、社会的総労働に基礎づけられて価値法則に糾合せられることになる。マルクスが繰り返し強調するように、「使用価値であることが依然として条件」、社会的欲求に照応する生産物(使用価値)総量が前提、担保、である。さきの価値規定一般のさいの使用価値であることの前提が、生産価格を踏まえた市場価値(市場生産価格)では、「別の意味」の社会的必要労働時間のかたちで拡充されて適用されるのである。

「抽象的労働」の生理学的自然的把握、または「労働の二重性」の超歴史的自然的解釈の立場にとっては、うえにみたような部門内・外の競争が繰り広げる全一連の市場諸関連を考慮に入れることはむずかしい。生理学的「抽象的労働」は、母体から切り離され「自然的事実」にまで還元されてしまう規定である限りでは、価値量規定の本来の尺度である「社会的に必要な労働時間」に上昇(論理展開)できない。さらにまた、とりわけ「別の意味の社会的必要労働時間」を尺度とした生産価格(市場生産価格)の相場の量規定にかんして、関説言及におよび得ないのである。価値論として致命的欠陥と言わざるをえない。

【補論】「労働の二重性」にかんする大谷禎之介所説

「商品に表される労働の二重性」をどのように性格づけるかの本稿主題の理解をめぐって、大谷禎之介は“歴史説”批判の立場表明で関与している。そうではあるが、論争の歴史的経緯とは異質な問題の立て方と特異な“超歴史的”解釈とにたって、“歴史説”批判を投げかけている(大谷禎之介『図解社会経済学』2001年、桜井書店、16-19頁)。以下、二つの論点について、批評コメントを付しておこう。

(1) 有用労働の量規定を「抽象的労働」とみなす取り違え

大谷は、「労働の二重性」をいつの時代どの社会にもあてはまる人類史共通の普遍的概念に

解釈し直す。符節を合わせてのことか大谷本では、『資本論』第1章第2節タイトルどおりに取り上げることせず、「労働」にかぶせられる“商品に表される”という規定（限定）をはずして、たんに「労働の二重性」と呼び、そのように俚上に載せている。論争史上の解釈論議の分岐的焦点を直視するのではなく、異質な問題の立て方で、特異な論点を掘り起こしている。

「経済学で労働を問題にするときには、どんな歴史的な社会におけるものであろうと、労働はつねに、この二つの側面〔「変形作用」と「労働力支出量」のこと……引用者〕を持つものとして取り扱われなければならない（注1）。／

（注1）：……労働が、変形作用と人間労働力支出の二側面から考察されなければならないのに、『労働の二重性』は商品生産に固有の概念だとする抜きがたい思い込み〔「歴史説」解釈のこと〕がひろまっている。このような主張をする人びと〔「歴史説」派〕は、労働の生産力の発展にともなう、生産物を生産する労働量の現象や、必須労働と剰余労働との区別を問題にするときは、労働を具体的な変形作用の違いを度外視した人間的労働力の支出として、つまり抽象的労働としてみていることに気づいていないのである。これを抽象的労働と呼ぶべきでないとしたら、そのかわりになんと呼ぶのであろうか。（同書、16-17頁。〔 〕内は引用者）。

従来の「抽象的労働」論争、「労働の二重性」論争の経緯の中で共有されてきた基本的な概念・規定や枠組みがはずされて、それらとは異なる新しい用語、新しい取扱い方で問題が立てられようとしている。試され済みパラダイムと新用語との対比をはかりつつ、問題の在りか・立て方そのものの点検が必要だろうと思われる。

まず冒頭に、「どんな歴史的な社会に」もあてはまる「労働」が取り上げられる。人間労働一般ないしは普遍的労働というものが考察対象となる。それが持つ「二つの側面」すなわち著者のいう「変形作用」と「労働力支出量」とが、論争論議に対置される。これは、『資本論』でいわゆる、「あらゆる社会形態から独立した、人間の一実存条件であり、人間と自然との物質代謝を……媒介する永遠の自然必然性」であるところの、「使用価値形成者としての有目的労働」（訳⁽¹⁾73/57）のことであろう。また、資本主義的生産に即してみた「労働過程」（第3篇第5章「労働過程と価値増殖過程」の第1節「労働過程」）と同定できるだろう。そう理解してよいならば、以下の諸点をチェックしなければならない。

第一に【有用労働の普遍性は自明の前提】、「鉄や紙などのような有用物は、どれも二重の観点から、質および量の観点から、考察されなければならない」とマルクスも言う（訳⁽¹⁾60/49）。その「使用価値の形成者としての有目的労働」についてもそうである。これらのこと、すなわち有用労働ないしは労働過程の「質」・「量」の諸属性が普遍的であることについては、言う

までもなく自明である。そのこと自体、問題の前提ではあっても問題に関与しうることではなく、係争問題 [価値を形成する「抽象的労働」は超歴史的吗否か?] にかかわることではない。

第二に【労働普遍性は問題関与せず】、「労働二重性」・「抽象的労働」論争は、第一の点の彼岸にはじめて立ち上がる。商品生産労働が、たんに有用的労働の性質だけに止まらないで、交換価値をつくり出す「抽象的労働」の性質面を併せ持つこと。しかも、前者有用的労働という諸属性が捨象されたときはじめて後者の同等性属性の面が浮上してくる。論争で問題となってきたのは、そこに抽出される無差別同等な「抽象的労働」の歴史的形態の性格付けをめぐることである。ほんらいの「労働二重性」問題が、ここは取り違えられて“有用的労働の質・量両面”問題に引き写されてしまった。こうして有用的労働に固執する大谷の立場は、論争のそうした問題構成にあずかりえず、問題圏外に置き去りにされたままである。

第三に【用語の混淆・取違え】、基本的概念（テクニカル・ターム）の誤用が議論の噛み合わせを妨げている。挙げられた事例では、「生産物を生産する労働量の現象や、必須労働と剰余労働との区別を問題にするときは、労働を具体的な変形作用の違いを度外視した人間的労働力の支出として、つまり抽象的労働としてみている」と。大谷の見る「抽象的労働」は、有用的労働の「質」・「量」二面のうちの「量」属性を指すものようである。しかし、その労働時間は、具体的な活動量を測る尺度として自然的な一属性に適用されるだけのことである。長さ、広さ、重さの自然属性をもつものにたいしてそれぞれ共有するものに適用されるのと同様である。事物に具体的に具わった自然属性を測る手続きを、「抽象する」操作だなどは、「抽象的なものとしてみている」などは、ひとは言わない。それは「尺度」と用語の誤用であろう。大谷の用法は、論争で共有されてきた「抽象的労働」概念とはまったく異なる用法なのである。

最後に【「歴史説」批判的はずれ】まとめると、(注1)において大谷は、有用的「労働」が、変形作用と人間労働力支出の二側面から考察されなければならないのに、「労働の二重性」は商品生産に固有の概念だとする抜きがたい思い込みがひろまっている」として、「歴史説」解釈を斥けようとしている。だが、ここには、有用的労働の質・量二面性を、ほんらいの「商品に表される労働の二重性」に置き替えてしまったこと、自然属性の尺度要件を不適切にも「抽象的労働」に読み替え、それとは異質な意味をもつ本来のキーワード「抽象的労働」に置き替えてしまった、という二重の取り違えがかさねられている。そこから発せられる「労働二重性」論議にたいする批評が正鵠を射えないであろうことは、予想にかたくない。

(2) 無意味な訳し分けと不整合の糊塗 「人間労働」と「人間的労働」

大谷禎之介が「労働の二重性」論議で「歴史説」解釈を牽制し批判する立場にたとうとしたことは上に見た。とはいえ、だからといって、「超歴史説」を共有し生理学的解釈派の主張に左袒するかというとそうでもない。上記の事例で見られたのは、用語や規定をファジーに用いて論争要点から離れてしまう立論であった。議論の用語を「読み替え」取り違え、議論の焦点

をはずしてしまっているのだ。

大谷は、他箇所でも次のように述べている。「第1段階：共同体を基礎とする人格的依存関係（共同体の生産関係と人格的な支配・隷属関係）、第2段階：貨幣による諸個人の物的な依存関係（商品生産関係と資本主義的生産関係）」（同書、29-34頁）などと述べ、人類史を二つの「段階」に区分し、商品のおよび資本主義的生産関係を「第2段階」に位置づけている。つまり、「商品に表される労働の二重性」が適用される特定の歴史的段階、しかも生産力がたかまり一定成熟した歴史的段階というものが容認されている。すると、こちらの見解では、むしろ「歴史説」の立場にたつと言うべきであろう。符節が合っていないのである。

こうした不整合が感知されてのことか、用語をファジーに使い分ける不可解な説明が用意されている。すなわち、人間の労働について、「広義」では「人間労働」と称し、「狭義」では「人間的労働」と呼ぶ、などと使い分けを施そうと提起される。

「たんに『人間労働』と言うときには、一般に、具体的労働と抽象的労働との両面をもつ人間の労働のことを指し、『人間的労働』と、……『的』を入れて言うときには、人間の労働の一つの側面である、人間労働力の支出としての労働（つまり抽象的労働）のことを指す。」（同書、18-19頁）

読み取りにくい言い回しであるが、後者の、「『人間的労働』と、……『的』を入れて言うときには、人間の労働の一つの側面である、人間労働力の支出としての労働（つまり抽象的労働）のことを指す」と言うならば、それは、前者「人間労働」に付随する「抽象的労働」とどう区別されるのだろうか。前者の、「具体的労働と抽象的労働との両面をもつ人間の労働」のその「人間の労働」の「一つの側面である……抽象的労働」と、どのように識別されるのだろうか。

大谷によれば、「労働の二重性」、じつは大谷のいわゆる有用的「労働の二面性」は、人類史に普遍的に妥当するが、これに対して、うえの「第2段階」説を取るときには、狭義の「人間労働」が登場しそこでは「労働の二重性」があてはまることとなる。そうだとすると、そこでは詰まるところ、“『人間的労働』のなかの『人間労働』段階の『抽象的労働』側面で価値をつくる”こととなる(!?)、などと言わざるをえない。日本語表記としても不可解な結びつきの労働価値論命題だ。また、ドイツ語表記に介してみれば、「人間労働」も「人間的労働」もともに *menschliche Arbeit* だろう。労働 *Arbeit* を規定する形容詞は双方ともに同じ *menschlich* であり、けっきょくは形容詞の訳出の際に「的」を入れるか入れないかという、些末な訳し分けの“アヤの違い”を弄するナンセンスな主張に、帰着せざるをえない。

キーワードをなす基礎概念（テクニカル・ターム）について、広義・狭義のファジーな言い分けを持ち込むことは、科学的論述では禁じ手だ。『資本論』テキスト記述における概念や規

定を、ここでは「労働の二重性」「抽象的労働」を、著者マルクスが書いた通りに読み取ることが、論争参画の前提であり要件であるはずである。そうした含意を汲みだそうとせず、こうして自らは門外席に身を置きながら、しかもフィールド内のマルクス価値論論争の範疇論議に介入しようという構図であろうか。

以上が当該論点にかんする大谷所説の中身とシナリオ概要である。

4. 未来社会における労働量計算 「自由人の連合体」を手がかりに

「抽象的労働」の非歴史的超歴史的な解釈の立場には、未来社会でのこの概念の積極的な意義や役割が付託されていた。ソ連の価値論論争では、計画経済における社会総労働の均衡配分のための計測可能性の拠りどころを、「抽象的労働」の生理学的同等性に見いだそうとする動機付け（「社会主義のもとではこの範疇は失効するのか、いっそうの重要度を増すのか？」）が横たわっていた。また、見田石介所説では、「未来の社会において、労働が……抽象的労働でなくなるような事態があったわけでも、あるわけでもない」と断じ、「将来の社会においては、……われわれは抽象的労働そのものを社会主義的なものと言わないだろう」（既出引用）、と浸透し定着する予想を述べていた。これらの立場は、未来社会における「抽象的労働」の積極的な意義や実在的なあり方がつよく意識されている。この点をマルクスはどのように見ていたのだろうか。

（1）非交換経済における労働時間の意義・役割と現れ方

『資本論』第1章商品物神性論（第4節）において、物神性の秘密を明らかにするために、それとは無縁なさまざまな経済的社会構成（体）——ロビンソン物語、中世封建制社会、家父長家族、自由人連合体、の四つ——を取り上げて、総労働の配分と労働時間のかかわり方を、比較考察している。以下、ロビンソン物語、自由人連合体等の場合を取り上げ、要点を見届けておこう（下線強調、[]は引用者）。

（1）【ロビンソン物語】「経済学はロビンソン物語を好むから、まず孤島のロビンソンに登場ねがおう。……彼の生産的機能はさまざまに異なっているけれども、彼はそれらの機能が同じロビンソンの相異なる活動形態にほかならず、したがって、人間活動の相異なる様式にほかならないことを知っている。彼は、必要そのものに迫られて、彼の時間を彼のさまざまな機能のあいだに正確に配分しなければならない。彼の全活動のなかでどの機能がより大きい範囲を占め、どの機能がより小さい範囲を占めるかは、所期の有用効果の達成のために克服されなければならない困難の大小 [つまり生産力の程度いかに……引用者] によって決まる。経験がそれを彼に教える。……彼の帳簿の財産目録には、彼が所有する使用対象と、

それらの生産に必要とされるさまざまな作業と、最後に、これらのさまざまな生産物の一定分量のために彼が平均的に費やす労働時間との一覧表が含まれている。……ロビンソンと彼の手製の富である諸物とのあいだのすべての関連は、ここではきわめて簡単明瞭であって、そこには、価値のすべての本質的規定が含まれている。」(訳(1)129 130/90 91)

生存に必須不可欠な生活物資(使用価値素材)の生産のために、ロビンソンの全労働時間が割り振りされる。その際、かなめは、それぞれの物資の調達のためには、なによりまず必要な生活物資(使用価値)の一定分量の確保のために、持ち合わせる労働生産力を基準に経験で割り出された必要な労働時間が配分される、という関連である。はじめに一定分量の使用価値の獲得課題があり、それにしたがって、生産力を考慮した必要な具体的労働量の確保である。直接に具体的な労働量つまり労働時間が充当されるのであって、商品交換経済の場合のように、「抽象的労働」の同等性に基づいて「社会的に必要な労働時間」で評価算定する価格[貨幣表示]計算という回り道をたどる必要は、毛頭ない。

(2)【家父長的農民家族】「自家用のために、穀物、家畜、糸、リンネル、衣類などのさまざまな物は、家族にたいして、その家族労働のさまざまな生産物として相対するが、それら自身が互いに商品として相対することはない。これらの生産物を生み出すさまざまな労働、農耕労働、牧畜労働、紡績労働、織布労働、裁縫労働などは、その自然形態のまま、社会的機能をなしている。なぜなら、それらは、商品生産と同じように、それ独自の自然発生的分業をもつ家族の諸機能だからである。男女の別、年齢の相違、および季節の推移につれて変わる労働の自然的諸条件が、家族のあいだでの労働の配分と個々の家族成員の労働時間とを規制する。しかし、ここでは、継続時間によってはかられる個人的労働力の支出が、はじめから、労働そのものの社会的規定として現れる。なぜなら、個人的労働力は、はじめから、家族の共同的労働力の器官としてのみ作用するからである。」(訳(1)132/92)

家父長的家族にまで拡張された、集団的規模の共同体的な経済構成の事例である。家族の個人的労働力は共同的労働力の器官としてのみ作用し、農耕、紡績、裁縫などさまざまな労働は、その具体的な自然形態のまま社会的機能をなしている。ロビンソンの場合と同様に、「抽象的労働」への還元、仲立ちでもって社会的労働としての承認を得るという回り道をたどる必要はない。

(2) 未来社会(自由人連合体)における労働時間の意義・役割

(3)【自由な人びとの連合体】「ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現され

るが、ただし、個人的にではなく社会的に、である。……この連合体の総生産物は一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は、ふたたび生産手段として役立つ。この部分は依然として社会的なものである。しかし、もう一つの部分は、生活手段として、連合体の成員によって消費される。この部分は、だから、彼らのあいだで分配されなければならない。この分配の仕方は、社会的生産有機体そのものの特殊な種類と、これに照応する生産者たちの歴史的発展程度とに依じて、変化するであろう。もっぱら商品生産と対比するだけのために、各生産者の生活手段の分け前は、彼の労働時間によって規定されるものと前提しよう。そうすると、労働時間は二重の役割を果たすことになるだろう。労働時間の社会的計画的配分は、さまざまな欲求にたいするさまざまな労働機能の正しい割合を規制する。他面では、労働時間は、同時に、共同労働にたいする生産者たちの個人的関与の尺度として役立つ、それゆえまた、共同生産物のうち個人的に消費されうる部分にたいする生産者たちの個人的分け前の尺度として役立つ。人びとが彼らの労働および労働生産物にたいしてもつ社会的諸関連は、ここでは、生産においても分配においても、簡単明瞭である。」(訳(1)133 134/92 93)

将来の「自由人の連合体」社会、ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が、個人的にではなく社会的に再現される。労働時間は、商品生産と対比できるかぎり、「二重の役割」を果たす。すなわち、一面で、社会の諸欲求に応じた社会的総生産物を生産するための、「労働時間の計画的配分」の規制の基準である。また他面で、総生産物のうちの個人的消費向け分についての分配に際しては、生産にたいする「個人的関与の尺度」であるとともにそれに依じた「個人的分け前の尺度」として、機能を果たす。

この場合、留意を要するのは、「商品生産と対比するかぎり」で、とマルクスが仮定的に「前提」づけしている、という点である。ここで対比考察に取り上げられている事例は、生産力が成熟をみる本来の共産主義社会ではない。資本主義的商品生産を脱皮したばかりの過渡期——いわば共産主義「第一段階」——である。そこでは、生産力の未達ゆえに労働の「外的強制や窮迫^{かせ}」の枷は未克服であり、言い換えれば物質的富の備えに限りがあり制約がのこっており、したがって、共同生産物の生活（消費）物資の配分をめぐるのは、なんらかの社会公正的な分配ルールに依存せざるを得ないという「前提」である。「労働時間」が——商品経済の価値法則が歴史的に果たしてきたように——「個人的分け前の尺度として役立つ」と推察できよう、ということである。

「自由人の連合体」においても、社会的労働の均衡配分の原則は、さきだつ非商品経済社会と同様である。なによりまず、「さまざまな欲求にたいするさまざまな労働機能の正しい割合」の規制、が要請される。すなわち、諸欲求に応じた社会的総生産物（使用価値）を生み出す諸労働機能つまりさまざまな具体的労働力（量）の適正な発揮、が肝要なことであり第一義課題である。とはいえ、この社会的労働の計測と均衡配分のために価値法則にたよる必要は少

しもない。商品経済で現れたように、「抽象的労働」に還元しこうして抽出された「価値実体」の現象形態（貨幣表示の「交換」）を仲立ちにすること、または計量評価の拠りどころにする迂回的手続きは、すこしも必要ない。提供される具体的労働量つまり自然形態のままの労働時間が尺度として通用するのである¹¹⁾。

むすびにかえて

以上、非交換経済における労働時間の役割や現れ方についてのマルクスの視点と見通しとを一瞥した。個人的にであれ（ロビンソン物語）社会的にであれ（家父長制集団や「自由人の連合社会」）、社会的総労働の配分のための計測尺度としては、具体的労働の労働時間が直接に尺度の役割を果たすのであって、「抽象的労働」への還元やそれに基づく迂回手続きの仲立ち・必要性はない、とマルクスの考察に即して論結することができる。生理学的「超歴史的」解釈の立場から提起されてきた、社会主義経済における「抽象的労働」概念の普遍妥当性（「社会主義のもとではこの範疇は重要度を増すか？」）と、労働量計測のための必要性の問題は、あたらなことが明らかになった。この点で、ソ連価値論論争の生理学的解釈派や見田石介による「抽象的労働」把握と一連の主張は、失当といわなければならない。

「はじめに」でみたように、『経済学批判要綱』でマルクスは、交換価値の終焉する未来社会を生産力発展に即して素描した。労働生産力が著しく伸張するにつれて、「現実的富の創造は、労働時間と充用された労働の量に依存することがますます少なくなり、……[生産力の]諸作用の力に依存するようになる。……/直接的形態における労働が富の偉大な源泉であることをやめてしまえば、労働時間は富の尺度であることを、だからまた交換価値は使用価値の尺度であることを、やめるし、またやめざるをえない」と。生産力の巨大な増進が直接的労働を縮減して、労働時間つまりは交換価値が「使用価値[富素材]の尺度」であることを廃棄させ、「それとともに交換価値を土台とする生産が崩壊する」と見通した。この見地は、マルクスの諸他のあらゆるテキスト文献章句での「労働の二重性」・「抽象的労働」をめぐる記述と符節が合うが、「超歴史的」解釈派や見田石介の把握とは、離反し、齟齬を来たすのである。

「超歴史説」派によれば、「抽象的労働」は「私的生産という条件のもとではじめて」価値実体となる、または価値をつくる。そうでない場合は（非交換経済の場合には）、それは自然的生理学的実体として在るにはあるけれども、経済的社会的カテゴリー「[価値実体]」としては、

11) 将来社会への過渡期（「第一段階」共産主義）において、たとえ価格計算方式が採り入れられ価値法則的な事象が起こるとしても、その事態は、事柄の性質上、「超」歴史性を問題とするここでの本来の論点とは、無関係である。それは先行社会の私的生産関係の残滓を条件とした当然の不可避な現れとみるべきであって、そのことはあたかも、奴隷制や中世など歴史的な先行諸時代の社会にあって、商品経済が部分的局部的にであれ成立し発展していたという史実と、同類のことである。

現実には現れえず潜在的に埋もれたままにとどまる，ということになるであろうか¹²⁾。これでは，経験的事象として確証（検証，再現）のできない，科学要件からはずれた，リアリティのない構想ブツないし観念的産物，との指摘をまぬかれない。科学的概念とその記述として致命的であり，成り立たない，と言うほかない。

(了)

12) 「抽象的労働」が，非交換経済では潜在したままで現実には現れないという限りでは，皮肉にも，「歴史説」派の解釈と合流することになる。